

淳之介 木馬と遊園地 わが文学生活 1963～1966

潮出版社

木馬と遊園地

定価 九八〇円

昭和五十八年七月十五日印刷

昭和五十八年七月二十五日発行

著者 吉行淳之介

発行者 富岡勇吉

発行所 株式会社潮出版社

〒102 東京都千代田区飯田橋三一一三

電話 東京(03)2302300七四一(販売部)

振替 東京 五一六一〇九〇

本文印刷 大日本印刷株式会社
付物印刷 栗田印刷株式会社
製本 東京美術紙工

乱丁・落丁本は送料弊社負担でお取り替えいたします。

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めて下さい。

© J. Yoshiyuki 1983 Printed in Japan

目次

一九六三年

実感的十返肇論

『花束』あとがき

営業方針について

現代・夜の紳士道

『誘惑者の手記』推薦

木馬のある風景

一九六四年

富永一朗論

コワモテ風の姿勢を排す

私の書きたい女

なぜ性を書くか

夏目伸六『父・夏目漱石』評

性と文学

『夜の噂』あとがき

達人の話

“久”と“上井草”

未知の人の手紙

二代目の記

外国旅行と私

ラクロの「危険な関係」から

野尻湖

北陸温泉郷・芸者問答

歳末点描

122 103 102 98 95 91 87 85 83 80 77 74 68

一九六五年

殊勲賞の弁

ジョン・レチー『夜の都会』評

別府・紀行

雑感

四十四歳の口説き方

映画と短篇小説

老眼鏡の話

高見順氏と私

私の能率学

辞書と机

山川方夫のこと

電話

『駒込蓬来町』推薦

雑誌『風景』編集後記

一九六六年

雑誌『風景』編集後記

新潮社文学賞受賞の言葉

飲む

酒中日記

『輕薄派の発想』あとがき

『エロ事師たち』推薦

芝居「雨か日和か」原作者の言葉

路地について

テーマの面白さ

名著発掘

作品と制作プロセス

映画「幸福」の感想

『星と月は天の穴』あとがき

才能を買う

道後温泉の夜

わが詩歌

『世相講談』推薦

初出一覧

248

215 219 221 224 226 238 246

装丁

前川

直

木馬と遊園地

わが文学生活一九六三―一九六六年

一九六三年

実感的十返肇論

十返肇は、昭和三十八年八月二十八日午前二時十二分、国立がんセンターの病室で死去した。四十九歳、若死である。病の進み方が奔馬性といえるほど速く、全身、癌に犯されていたことが解剖の結果わかった。唯、肝臓だけには癌が認められなかったと聞く。

半年前までは、十返さんが死んでしまうということなど夢想さえできないことだった。三十七年秋の「日記」の一部に、私は次のように書いている。『新宿へ出て、酒肆G、T、Cと歴訪。Tで、風間完、十返千鶴子氏に出遭う。十返肇が人間ドックへ入ったとか入らなかったとかの話が出たが、酔っていて記憶があいまいである。酔ったまぎれに、「十返さんは病氣にはなりっこありませんよ。百まで生きて、勝栗を煮しめたような頑健さで、どの葬式にも十返さんがいる、といった按配です」とか言った記憶がある』酔ったまぎれとはいえ、女性に向かって言うべき言い方ではなかった、と翌日反省したが、そうおもった気持ちに嘘はなかった。

四月末、舌のできものを切り取るとかで慶応病院に十返さんが入院したとき、厭な予感があ

った。慶応病院に見舞いに行ったときには、口がきけなくて筆談だったが、十返さんはまだ元氣だった。もつとも、二度目に行ったときにはかなり憔悴の色がみえ、辛い氣持だった。十返さんは窓からみえる新宿の温泉マークのネオンを指さして、「あれが氣にかかる」という道化た素振りをしたが、それは見舞客の氣持をやわらげるサービスとも取れて、私は一層ツライ氣持になった。

以来、私は見舞いに行っていない。一つには、私自身の大患のときの體驗から推し測って、憔悴した姿を見られたくないのではあるまいか、見舞客が負担になりはしまいか、とおもったためでもある。しかし、後日聞くとところによると、十返さん自身は見舞客のくることを喜んでいたようだ。

七月のある夜のこと、新宿のバーへ行くと、マダムの新藤涼子さんが、いま十返さんを見舞ってきたところだ、という。涼子さんがフランスへ出発する前で十返さんは餞別の金を容れた封筒を前にして、片手で頭をかかえて長い時間じっとしていた。そして、ようやく筆を持って、「志」と書いた、という。その時期には、はげしい頭痛が十返さんを襲うようになっていた。

「おい、それはいけないね。志、とは香典がえしのとき書く字だよ」

と私が言うと、新藤涼子にはわかに泣き出して、

「そうなのよ、だから……」

そう言われて、私はギクリとした。「志」という文字の使い方を、十返さんが失念したのではないか、とも私は考えていたのである。私は、もう一度見舞いに行こうか、と改めて迷い、結局、行かないことにした。一度、十返さんが元通りの元氣な顔で動きまわっている夢を見たことがある。

八月二十七日の夜九時頃、がんセンターから梶山季之が電話をくれた。危篤という電話ではなかったが、ただならぬ気配に、すぐに出掛けて行つた。ベッドの上の顔は二まわり小さくなり、死相があつた。傍で誰かが「手を握つてあげなさい」と言い、私が手を掴んでその手の甲を軽く叩くと、眼を向けて、にっと笑う顔つきを示した。その眼には光がなくて、私を認めたかどうか分らなかったし、笑顔とはいえぬ悲しい歪んだ顔をつくろうとしている気持は十分に分つた。それはまた、別れを告げている顔でもあつた。立派な顔だつた。

医師が今夜は大丈夫というので、十人あまりの見舞客は引きあげることにした。予感があつたが、私は臨終の場には居合わせなくなかつた。夜中に電話があつて、ふたたび病院へ行つたときには、もう十返肇は生きていなかった。母堂と千鶴子夫人、義兄の風間完、青山光二、文藝春秋の檜原雅春、角川書店の山本容朗の諸氏と私とで、遺体を靈安室に運んだ。そのとき、人氣のない廊下に風間完さんと二人だけになったときの会話が印象深い。

「八十くらいまでは生きるとおもっていた」

と私が言うと、風間さんは独特の飄逸でそして慤然とした口調で、言った。

「いや、そうでないね。あいつはやっぱ異常なところのある人間だよ。十一、二でおちんちんに毛が生えそろってしまつてさ、それからどんどん大速力で人生を終わってしまう人間があるじゃないか。あいつも、そのクチだよ」

そう言われれば確かにその通りである。十返肇がいわゆる文壇に登場したのは、十八歳のときである。「檻樓の旗」などの評論で、早熟な天才的少年として知られた。以来三十年、普通の文筆家の一生分の仕事をすでにしてきたことになる。風間さんの言葉を死者の冥福を祈ることのない言葉として、私は聞いた。また、あきらめ切れぬがあきらめるより仕方のない、後に残されたものの知恵にあふれた言葉とも聞えた。

以上の部分を読み直してみると、やや追悼文風のところもあるようにおもえるが、けっして故人を美化して書いているわけではない。たまたま奥野健男の文章が眼に触れたので、その一部分を引用させてもらう。『どういうわけか十返さんは葬式の真似が好きで、「では御遺族の方から御焼香を」とか、「故人はいい人でありました」とか言つては、「何を死んでから、今さらしくほめたって……」と皮肉に笑った。「故人はいい人でありました」というような文章は、十返さんに対して失礼であるから書くまい』